



名古屋大学
Nagoya University

名古屋大学プロフィール2008

NAGOYA UNIVERSITY PROFILE 2008

名古屋大学
プロフィール
2008





04 特集 1 【巻頭対談】

志で世界に挑む

東レ株式会社 代表取締役社長 兼 CEO 榊原定征
名古屋大学総長 平野真一

10 特集 2 名古屋大学のGCOE

大学院教育の
新たな地平を拓くために
名古屋大学理事 山本進一

世界先端レベルの
研究者育成を目指して。

12 分子性機能物質科学の国際教育研究拠点形成 拠点リーダー 物質科学国際研究センター教授 渡辺芳人

14 システム生命科学の展開：生命機能の設計 拠点リーダー 理学研究科教授 近藤孝男

16 テキスト布置の解釈学的研究と教育 拠点リーダー 文学研究科教授 佐藤彰一

18 FRONTIERS 名古屋大学 最前線

22 ❶ 豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイ

23 ❷ 特別招へい教授

24 ❸ 国際産学官連携

25 ❹ 東京フォーラム

26 ❺ 教育発達科学研究科

❻ 医学系研究科

❼ 生命農学研究科

27 ❽ 地球水循環研究センター

❾ 小型シンクロtron光研究センター

❿ 国際開発研究科／環境学研究科

28 各部署の取り組み一覧

29 学生からの寄稿

名古屋大学体育会女子陸上競技部

30 大学概要

32 卒業生からの寄稿

三遊亭圓王

NAGOYA UNIVERSITY PROFILE 2008

名古屋大学
プロフィール
2008

人が、 世界を変える。

創造的な研究活動によって真理を探究し、世界屈指の知的成果を産み出す。
同時に、自発性を重視する教育実践によって、
論理的思考力と想像力に富んだ勇気ある知識人を育てる。
国立大学法人名古屋大学は、学術憲章に掲げた目標に向かって
研究・教育環境の改革を推し進めてきました。
なかでも近年は、社会からの強い要請に応じて
国際的な視野に立った人材育成の体制を強化しています。
どの時代においても、世界を動かし変えるのは、人。
ときに、たった一人の発想、行動が、未来への道を切り拓きます。
本誌では、人を育てるという大学の原点に立ち返った
名古屋大学の最新の取り組みを紹介します。

特集 1
【巻頭対談】

志で世界に挑む

東レ株式会社 代表取締役社長 兼 CEO
榊原定征 Sadayuki Sakakibara

名古屋大学 総長
平野眞一 Shin-ichi Hirano

真の教育が求められる時代のなか、今後、名古屋大学はどうあるべきか。その指針とすべく、受け継がれる教育風土や国際的な人材育成、ものづくりの地を拠点とする大学の役割などについて、高い志を貫き、世界最先端の総合化学企業を牽引する東レ社長の榊原定征氏と平野眞一総長に語り合っていました。

最高水準を目指す 学風を継承して

平野 グローバル競争時代において、人材育成を担う教育機関、特に大学教育のあり方が問われています。私が教育の原点と考えているのが、かつて愛知県の知多半島にあった「鈴溪義塾」*の精神です。社長も私と同じ知多出身ですからご存知でしょう。

榊原 祖父が鈴溪義塾出身で、子どもの頃

から話は聞いていました。鈴溪義塾が素晴らしいのは、当時、日本の学校の教育方針は多くが「立身出世主義」だったのに対し、「学問水準の高さ」と「人徳教育」を大切にしていたことです。その教えは周辺地域の教育風土にも影響を与えたのではないのでしょうか。平野 私の祖父も鈴溪義塾の卒業生ですし、偶然にも名古屋大学の創設や発展に貢献してくださった方々も鈴溪義塾出身です。社長と私は地元の同じ高校を出て、ともに名古屋大学工学部で学んだ同級生ですが、これまで歩んできた道は、どこかで鈴溪ゆかりの方々が支えてくださっていたと思います。

榊原 鈴溪義塾で使われていた教科書の名は「嚶鳴館遺草」、名古屋大学の学生寮の名は「嚶鳴寮」（現「国際嚶鳴館」）。学問水準の高さを追求するという点でも、名古屋大学には脈々とその精神が受け継がれていると思います。私たちが名古屋大学で応用化学を学んでいた当時を思い出しても、

教授陣には日本の最高権威が綺羅星のごとく集まっていた。私は授業のたびに学問に対する崇高な冷厳さに感銘を受けたものです。研究室は自由闊達で学生は研究や実験に熱中でき、私は新しい化合物をつくっては学会誌に発表し、ものづくりの喜びを感じていました。また、語学教育も熱心で、英語はもちろんドイツ語、ロシア語も徹底的に鍛えられた。こうした経験は社会人になってからの私の大きな財産になっています。

平野 あの頃、先生方は次の人を育てていくんだという気概、我々こそが日本の最先端だという意識で学生に接してくれました。あのような環境は独自の学風を生んだと思いますし、私どもはそれを継承する教育環境をつくっていかなければなりません。

※ 鈴溪義塾
明治21（1888）年、愛知県知多郡小鈴谷（現在の常滑市）に盛田命祺（盛田昭夫元ソニー会長の高祖父）が創設した私塾。今でいう小学校高学年から中学校低学年にあたる子どもたちに現在の高校に匹敵する高度な教育を展開し、トヨタ中興の祖・石田退三をはじめ各界に著名人を輩出した。



志で世界に挑む

産業界のニーズに応える 能力の養成

平野 科学技術創造立国日本にとって人は大切な資源ですが、社長の人材育成についてのお考えをお聞かせ願えますか。企業と大学では考え方に相違点、共通点があるかと思いますが。

榊原 私は「企業の盛衰は人が制し、人こそが企業の未来を拓く」を理念に、人材育成こそ企業の最も重要な経営課題と考え、大きな力を注いでいます。企業と大学の相違点としては、大学の役割は知の創造＝研究、知の継承＝教育であり、インプットを重視します。企業の場合は高度な研究を進めながらも、製品化、事業化などのアウトプットを求めます。ただ、基本となる自己研鑽能力、自己啓発意欲の育成は共通でしょう。新入社員には、「会社は人生の総合大学。これからは実学の始まりであり、よく学んで、いち早く世界に通用するその道のプロになろう」と話しています。

平野 大学は研究者・教育者となる人材の育成、社会で活躍できる人材の育成という2つの役割を担っています。どちらにせよ人間性を高めると同時に基礎学力をつけ、全体を俯瞰できる総合力、さらには単なる問題解決力だけではなく、課題探求力を養成することも大切です。名古屋大学はその点を重視し、さらに強化していきたいと考えています。また、世界で戦うためには自分の考えを伝えられるコミュニケーション能力は不可欠です。そこで英語力を高めるシステムの再構築にも取り組んでいます。

榊原 今のお話をうかがい非常に心強く感

じました。先日、「産学人材育成パートナーシップ」の会合で示された産業界が求める人材像には、総長がおっしゃったポイントが全て含まれています。それは、専門分野の土台となる基礎学力、人間力。そしてグローバルな視野とコミュニケーション能力。さらに、博士課程に進む人には問題解決力に加えて問題発見能力、課題設定能力を身につけてほしいという提案でした。名古屋大学の教育方針は、まさに産業界のニーズと合致しています。

自己の確立が 国際社会での活躍の基盤

平野 教育の国際化も大学にとっては急務です。世界で活躍する人材にはどのような能力が必要だと思われますか。

榊原 当社は海外21カ国にグループ企業があり、海外出向者は約400人、海外の雇用者数は約20,000人に上ります。ビジネスには英語が必須ですし、社員には常にグローバルな視点でものを考える習慣を身につけることが大事だと言っています。また、その前提として必要なのが日本の文化・伝統を理解し、日本語で自分の意見を表明できるコミュニケーション力を持つこと。そして外国の文化・伝統を理解し、尊重できる人間としての広さを持つこと。そうすれば、国は関係なく人間同士で信頼しあうことができるのです。平野 私も同じ考えです。今、名古屋大学では74カ国・地域、1,214名の留学生が学んでいます。このキャンパスは小さな地球。多様な国の歴史、文化、宗教を学ぶチャンスにあ

ふれている。学生には異文化を理解し相手を尊重しながら、自分の依って立つところ、アイデンティティを確立しなさいと話しています。一方で留学生には、いい形で日本を理解し、充実した学習環境だと思ってくれるよう支援体制の強化に努めています。帰国後、世界のため日本のために活躍できる人を一人でも多く育てたいというのが願いです。

榊原 留学生にどういう気持ちで帰ってもらうかは非常に大事ですね。日本を好きになって連携してくれるような人に育ってくれたら素晴らしいと思います。

平野 今年度からは博士課程後期課程の2年生約100名を選んで、海外の研究機関に派遣する国際学術交流奨励事業も始めました。学生は世界に出ることで自分の存在意義を確認でき、今後に対する考え方を確立できますし、語学面では苦労を通じてその重要性を再認識することでしょう。資金的には大変ですが、継続が大切ですので今お願いしている名古屋大学基金の活用も考えながら続けていきます。数年後を楽しみにしててください。

開発の継続が 技術を生み人を育てる

平野 先ほど企業はアウトプットを求めるというお話でしたが、東レは経営苦境のときも炭素繊維の研究を続け、ついに世界に冠たるビジネスへと成長させました。

榊原 ITバブルが崩壊した2001年、当社は業績が落ち込み、私は社長就任と同時にまず徹底した費用削減を行ったんです。た



キャンパスは小さな地球。
学生には異文化を理解し相手を尊重しながら、
自分のアイデンティティを
確立してほしいと願っています。

平野 眞一 Shin-ichi Hirano
1942年生まれ。名古屋大学大学院工学研究科応用化学専攻博士課程修了。工学博士。無機材料化学、セラミックスを専門分野に、金属有機化合物の無機質化による無機機能性材料の合成、高機能結晶の水熱合成などの研究で工学界に貢献する。アメリカセラミック学会フェロー。2004年名古屋大学総長に就任。2006年、アメリカセラミック学会の最高榮譽賞、ディステインギッシュド ライフメンバーシップ賞を史上最年少で受賞。



日本の一研究者が
世界を変えるような大発明をしたと知り、
自分もこんな大仕事がしたいと夢を描いた。
それが私の志の原点です。

榊原定征 Sadayuki Sakakibara
1943年生まれ。名古屋大学大学院
工学研究科応用化学専攻修士課程
修了後、東レ株式会社入社。業績悪
化を受けて、2002年6月代表取締役
社長に就任。守りと攻めの経営改革
により劇的なV字回復を達成し、2006
年度には営業利益を5倍にする。また、
旅客機の構造材に使用される炭素
繊維の独占供給契約をボーイング社
と結び、同分野で世界トップの座を築く。
2004年から同社最高経営責任者も
兼務。現在日本経団連副会長。

だし、一人の従業員のクビも切らず、研究開
発費には手をつけませんでした。研究開発
費を減らせば一時的に収益に貢献しますが、
技術開発は一度途絶えたら、後からそのツ
ケがボディーブローのように効いてくる。続
けていないと技術の芽が出なくなります。そ
れは技術系の社長でないと理解できなかった
かもしれません。メーカーには継続的な研
究、人づくりを行う土壌が必要なんです。
平野 目先の利益を求めて逆を行う企業も
少なくありませんが、耐えて続けていけば人
も育ってくるという信念がおりだったんで
すね。

榊原 その通りです。研究者たちも苦しい中
で研究開発費だけは維持されたことがわか
るわけですから、発奮しますよ。そうしてい
るうちに新しい技術が育ってきた。炭素繊維
はずっと赤字でしたが約40年という歳月を
かけて、今、ようやく事業として収益が上がり
始めました。
平野 多くの企業が炭素繊維から撤退する
中、東レでは収益が出ないにもかかわらず、
ずっと研究を続けてこられました。それは歴
代の社長も含めて大変な決断だったと思い
ます。

榊原 私が炭素繊維に出会ったのは高校
時代です。たまたま雑誌で、飛行機の構造
材料に代替できる夢の繊維を日本人研究
者が世界で初めて発明した、という記事を見
つけました。当時は戦後の経済復興の途
上。日本はすべての面で欧米に遅れていま
したが、日本の一研究者が世界を変えるよう
な大発明をしたと知り、血湧き肉躍る感動を
覚え、自分もこんな大仕事がしたいと夢を描
いた。それが私の志の原点であり、当社に

入った動機でもあります。私自身、その志を
持ち続けてきましたし、当社の諸先輩も同じ
でずっと耐えてやり続けてきたからこそ、今
があると思います。
平野 ものづくりと人材育成にかける高い志
に感服します。若い人たちにもぜひ伝えて
いきたいと思います。

科学技術創造立国の拠点を 支えていく

平野 名古屋大学は日本のものづくりの拠点・
愛知県に立地していますが、今後、どのよう
な役割を果たすべきとお考えですか。

榊原 名古屋大学は数多くの革新的な取り
組みをされていますが、特に世界最高水準
の研究・教育を目指し、国際社会で活躍で
きる人材を育成するという方針は大切だと思
います。同時に、産学官連携の一大拠点
として世界へ学術成果を発信していくことも
強化していただきたい。日本の国の形は製
造業立国です。ものをつくって輸出をし、外
貨を稼いで、石油や食糧などすべての資源
を買うわけです。それを支えるのは科学技
術です。つまり、科学技術創造立国を目指
す日本の拠点が愛知県にあり、それを研究面、
人材面で支えるのが名古屋大学の一番重
要な役割だと思います。

平野 私はセラミックをずっと研究してきま
したが、多くの企業の方にお世話になり育て
いただきました。セラミック分野で日本が
世界をリードしているのも、こうした連携あ
ってこそだと思います。東レにも医学部の寄
附講座を通じて大学の知をずっと応援して

いただき、感謝しております。今後も真の産
学官連携を進めるために、一層、基礎研究
を深めていくつもりです。

榊原 ものづくりの風土が育てた愛知県人、
名古屋人の気質は、「実」の字に集約され
ます。性格・行動は誠実、堅実、質実であり、
仕事ぶりは実務、実践に強く、実行力がある。
後輩諸君には、実という名古屋大学の
DNAに誇りを持って継承、発展させてもら
いたいですね。そして、高い志を持ってほしい。
志を持ち続け前向きに努力すれば、いつの
日か新たな道が拓け、夢が実現すると私は
信じています。

平野 今日はあらためて母校に対する榊原
社長の想いに触れ、私も力を得ました。今
後も、世界の次代を背負っていく志高き人
材の育成を目指し、努力を重ねてまいります。
本日はお忙しい中、ありがとうございました。



特集 2

名古屋大学のGCOE

大学の国際競争力を高め、世界をリードする人材を育てていく。

日本の高等教育における世界戦略として

文部科学省が実施するグローバルCOEプログラム。

名古屋大学では山本進一理事（研究関係担当）をはじめとする役員会が、早い段階から各部局にテーマを募って、

教育研究プロジェクトのチームをつくり、プログラムへの申請準備を支援。

その結果、2007年度は「生命科学」「化学・材料科学」

「人文科学」分野において、各1拠点、計3拠点が採択されました。

採択の基盤となったのが、日本の大学では先駆けとなる

「高等研究院研究者育成特別プログラム（テニュアトラック制度）」、

「発展型女性研究者支援名大モデル」などの多彩な支援制度です。

また、名古屋大学ならではの自由闊達な研究風土と

ものづくり拠点に立地し、産学連携の盛んな環境も

研究者の成長を後押しする強力なバックグラウンドとなっています。

そして、今、グローバルCOEプログラムに採択された3拠点を中心に、

日本の新たな大学院教育のあり方を構築しようとしています。

グローバルCOEプログラム（Global Centers Of Excellence Program）

ポスト「21世紀COEプログラム」として、2007年度から始まった文部科学省のプログラム。

学際・複合・新領域も含めたすべての学問分野を対象として、

特に産業界も含めた社会のあらゆる分野で、

国際的に活躍できる若手研究者の育成機能の抜本的強化と、

国際的に卓越した教育研究拠点の形成を図る。

大学院教育の 新たな地平を拓くために

我々にはGCOEを支援する十分な体制があり、

今後も新たなプロジェクトの採択を目指していきます。

結果はもちろんですが、国内外の大学間競争に勝つために、

絶えずチャレンジしていくことが重要です。

名古屋大学理事

山本進一

やまもと しんいち

1952年生まれ。京都大学大学院農学研究科博士後期課程林学専攻修了。農学博士。岡山大学を経て、1999年から名古屋大学大学院生命農学研究科教授。森林生態学、森林保全学を専門とし、30～40年というスパンで森林の生態を見守り続ける。理事（研究関係担当）。副総長。

世界先端レベルの 研究者育成を目指して。

世界トップクラスの教育研究拠点として、名古屋大学はどのような研究者を育てていくのか。
その戦略を語るのが、グローバルCOEプログラムに採択された3拠点です。
各分野において、日本を代表する研究機関であり
その研究活動が世界的にも評価される3拠点が取り組むのは、
世界と戦える研究者育成のための仕組みづくり。
それぞれの挑戦と次代の展望を見つめていきます。

分子性機能物質科学の 国際教育研究拠点形成

国際的なネットワークを
活用した
最先端の研究環境が
成長を加速させる。

社会が期待する化学の課題、 すべてに応える。

国家レベルでの人材獲得競争が加速する中、教育の国際化に力を入れているのが、
渡辺芳人教授が拠点リーダーを担う「分子性機能物質科学の国際教育研究拠点形成」です。理学研究科・工学研究科から人材が集結した本拠点では、薬品開発に代表される合成化学から、日本の産



業を支える高分子科学、フラーレンやナノチューブなどのナノ分子科学、複雑な生命現象の解明に挑む生命科学まで、現代社会が化学に期待するすべての分野を研究対象として網羅。メンバーは相互に情報交換しながら研究を展開し、その成果はいずれ世に還元されるものと注目を集めています。

ノーベル賞受賞者をはじめ 世界的な研究者が集結。

教育の国際化に関し、誰もが認める強みと言えるのが名古屋大学ならではの研究環境です。教授ら実際の指導陣はもとより、ノーベル化学賞受賞の野依良治特別教授、カーボンナノチューブの発明者である飯島澄男特別招へい教授など、世界にその名を轟かす研究者たちが一大研究拠点を形成。共同研究を求めて各国の人材が集まる好循環が生まれています。本拠点ではそうした研究者の持つ国際的なネットワークを活用し、世界第一線の研究者たちによる国際セミナーを開催。彼らの姿を見聞することが、次代を担う若き研究者たちに与える教育効果は計りしれません。

世界に開かれた大学として 真の拠点形成を目指す。

層の厚い指導陣だけでなく、国際化のための実質的な戦略も本拠点の特長です。

実践的な英語教育はもちろん、拠点のウェブサイトは英語を標準とし、海外の学生向けに研究内容を書き込めるフォーマットを作成。そのために招いたドイツ人准教授が窓口となり、留学生と教員とのマッチングを支援しています。また、世界中の博士課程の学生が見るサイトに研究員の募集要項をアップ。現在、本拠点で雇用する博士研究員のうち50%が外国人と、既に成果を挙げています。「我々が目指すのは、ただ日本から世界に出ましようということではなく、常にどこの研究室にも留学生や外国からの研究者がいる教育研究拠点づくり」と教授。その言葉には、真の国際教育研究拠点を目指す名古屋大学の強い意志が息づいています。



拠点リーダー
物質科学国際研究
センター教授
渡辺 芳人

わたなべよしひと
1953年生まれ。1982年、筑波大学大学院化学研究科博士課程修了。理学博士。慶応大学医学部助手、京都大学工学研究科助教授、岡崎国立共同研究機構分子科学研究所教授等を経て、2002年から名古屋大学理学研究科教授。金属酵素の作用を解明する研究成果に基づき、人為的に酵素を作り上げる研究を展開する。



渡辺教授の拠点には、世界各国から若手研究者が集結。互いの文化や習慣について理解を深めながら、協力して研究に取り組んでいる。英語での会話や思考を標準とする研究環境で、日常的に国際性が養われる。

世界先端レベルの 研究者育成を目指して。

システム生命科学の展開： 生命機能の設計

多様な能力を備えた
研究者を育て
次代の生命科学の
中心拠点へ。

分子生物学+ α の 研究能力を養成する。

国際性とともに、研究者には一つの専門分野だけにとらわれない視野と能力が必要とされる時代。生命科学の研究においても、ゲノム解読の生命科学を切り拓くこれからの研究者には、従来の分子生物学に加え、複雑な生命現象を解析する多様な研究能力が求められるようになっていきます。近藤孝男教授を拠点リーダーとする「システム生命科学の展開：生命機能の設計」では、理学研究科と生命農学研究科が連携し、生物時計や魚の編模

様の生成、稲の育種技術など多様で複雑な研究テーマを展開。そのもとで行う人材育成においては、分子生物学+ α の力を養うための多様な教育方針を打ち出しています。それは、分子生物学の限界を見つめ、教授らが定義したシステム生命科学研究の新たな方向性に沿うものです。

システム生命科学の最先端へ 大きなアドバンテージ。

従来の分子生物学の限界。それは個々の遺伝子の働きは理解できるものの、それだけでは多数の因子の相互作用が生み出す複雑な生命現象が説明できないという点にあります。「自動車のエンジニアは、車の用途に合わせて、多数の部品の機能を理解し、それを組み合わせて、最適なエンジンをデザインする。生物学者は実際に生命を設計することはできないが、そのレベルまで生命について理解しなければ、真の理解とは言えない」と教授が語る通り、生命科学には新たな展開が求められています。そこで、本拠点では「生命の設計」を目標に、多様なアブ

ローチで複雑な生命現象の必然と偶然を解明できるように、分子生物学の基盤の上に分子構造解析、情報理論、数理解析といった多様な手法の習得を推進。今、若い研究者が複合的な能力を身につけておけば、将来、世界最先端で活躍するための大きなアドバンテージになると教授は期待します。

名古屋大学初の試みとなる 教育プログラムを開発。

ユニークなのが、+ α の力の習得のために開発した教育プログラム。研究手法や視点の幅を広げるために一定期間、別の研究室で過ごす「第二専門領域習得制度」、ポスドクや研究員として活動する前に半年間、他の研究室で実践的に学ぶ「プレフェロー制度」は、どちらも名古屋大学初の試みとして注目されています。さらに、海外企業のインターンシップへの参加支援、理と農のチームワークの強化を図る合宿形式での学習会なども実施。これらの多様な能力を備えた研究者育成を目指す革新的な取り組みは、名古屋大学の新たな教育モデルとしても大きな可能性を感じさせます。



拠点リーダー
理学研究科教授
近藤孝男

こんどうたかお
1948年生まれ。1978年、名古屋大学大学院理学研究科生物学専攻博士課程修了。理学博士。岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所助手を経て、1995年から名古屋大学理学研究科教授。生物が日々どのような生活を送っているか、その生き様を理解するために、シアノバクテリアを使った概日時計の研究を展開する。



ゼブラフィッシュを飼育する水槽が並ぶ研究室。分子生物学+数理解析を柱とするグループが、コンピュータシミュレーションの予測を証明するための実験を行う。「システム生命科学の展開：生命機能の設計」の拠点メンバーである近藤滋教授の研究室では、多様な教育が展開されている。



テキスト研究を進める佐藤教授の拠点では、貴重な古文書も研究対象となる。手にしているのは7世紀のメロウイング朝国王文書。読解にはテキストが書かれた時代背景も知る必要があり、その教育内容は高度で多岐にわたる。

世界先端レベルの
研究者育成を目指して。

テキスト布置の 解釈学的研究と教育

テキスト研究を通じ、
国際理解に貢献できる
研究者を輩出。

人文学分野において希有な 世界水準の研究を展開。

理系に比べ言語や文化の壁が高く、世界水準の研究が進めにくい文系ですが、名古屋大学は人文学分野においても世界的な教育研究拠点を有しています。それが佐藤彰一教授を拠点リーダーとする「テキスト布置の解釈学的研究と教育」です。文学研究科を中心とする本拠点では、研究成果を海外で出版するほか、年3回のペースで国際シンポジウムを開催。海外研究機関との協力関係によって、大学院生には先端的な研究に触れる機会が数

多く用意されています。また、英語・フランス語での発表、論文作成の指導など、国際的な発信能力の高い研究者の育成に取り組んでいます。

法や経済など社会に貢献する テキストの布置解釈。

本拠点の研究内容は、文字や言語などのテキストを成立させる多様な要因の布置関係を解明しようというもの。例えば、文学作品には作家の言語体験や経験などが反映される一方で、読者にも自分の言語体験や経験などがあり、そのことへの理解を抜きに作品の解釈はできません。ふたつの間には齟齬があり、作品の解釈はそう簡単ではないのです。こうしたテキストの布置解釈は、今、社会的にも重要性が増しています。特に法文書の解釈は、一般市民が参加する裁判員制度の施行にあたって大きな課題となっています。また、グローバルな経済活動においても相手の提案の背景を理解しているか否かで、コミ

ュニケーションの深さは違ってくるでしょう。そのため本拠点には法学研究科、経済学研究科からも研究者が参加。法テキストや経済思想テキストの研究教育も視野に入れています。

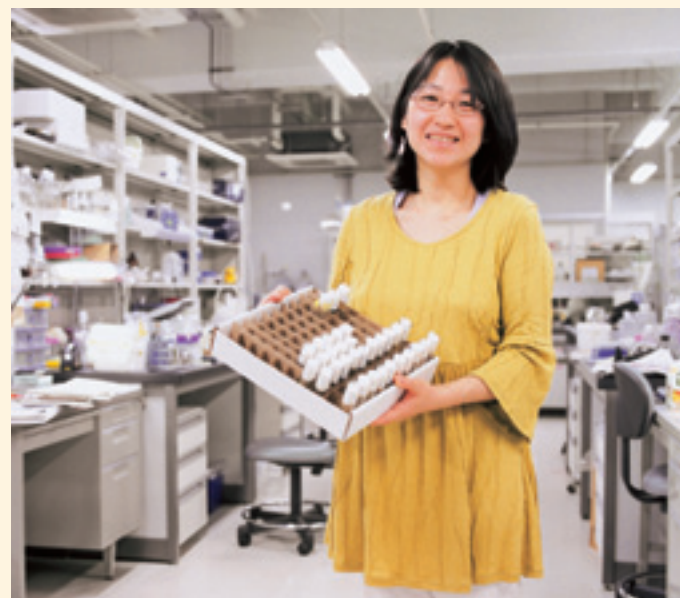
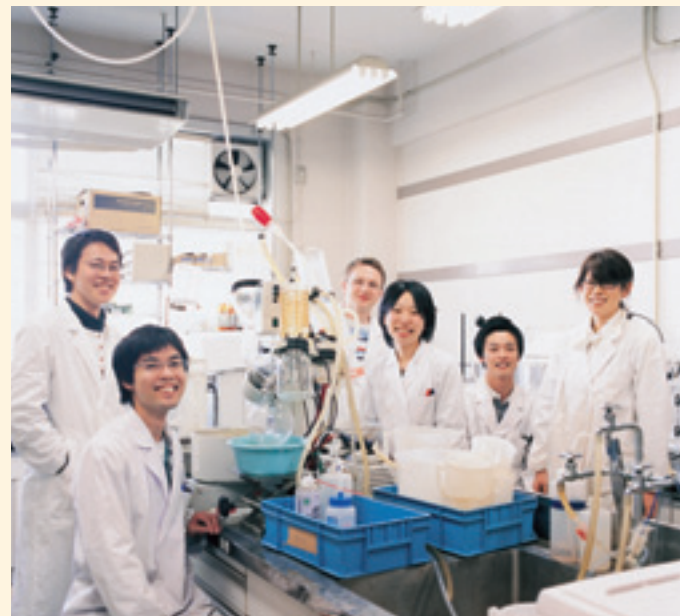
世界の課題を解決に導く コミュニケーション能力を。

教授は、テキスト布置の研究に取り組む大学院生たちへの期待を語ります。「研究者になるにせよ、社会に出るにせよ、コミュニケーションとは、ただ相手が情報をメッセージしているだけではないという意識を持つことが重要。相手をより深く、広い背景から理解できれば、衝突や対立の多くは解決できるのではないだろうか」。理解不足から来る誤解がさまざまな問題を複雑にしている、昨今のグローバル社会。そこではあらゆる課題を探求し、解決できる人材が求められています。名古屋大学の学術憲章にある「勇気ある知識人」の姿が、本拠点からは明確に見えてきます。



拠点リーダー
文学研究科教授
佐藤彰一

さとうしょういち
1945年生まれ。1971年、早稲田大学大学院文学研究科修了。日本学術振興会奨励研究員を経て、1979年、愛知大学法経学部助教授。1987年、名古屋大学文学部助教授。1991年同教授。2002年、日本学士院賞受賞。「封建制」概念の流布の系譜をたどり、封建制に関連するテキストの布置構造の解明に取り組む。



日本の競争力を高め、 世界を担う人材へ。

3拠点の取り組みから見えてくるもの。
それは、世界に開かれた大学としての国際性の確立、
視野の広い研究者になるための多様な機会の提供など、
日本の大学院教育が抱える課題への一つの解答でもあります。
資源のない国・日本が、世界で戦っていくための唯一の資源は人材です。
名古屋大学は、独自の教育プログラムを通じて
高度な研究能力と国際性、多様性を育むことで、日本の国際競争力を高め、
世界が直面する課題の解決に貢献できる人材を輩出しています。



名古屋大学は世界に冠たる教育研究拠点として、
全学及び各部局において、
さまざまな取り組みを進めています。
この「FRONTIERS 名古屋大学 最前線」では、
その中から、特に注目すべきニュース10件を取り上げ、
最新の動向や目指す未来像を紹介します。

名古屋大学 最前線

FRONTIERS

創立70周年事業の柱として 大学の象徴である豊田講堂を改修。

1960年、名古屋大学のシンボルとして建設された豊田講堂。
約半世紀にわたって多くの人々に親しまれてきましたが
創立70周年に向けて機能を拡張するために、
2006年、改修工事に着手。
建設当時の面影を受け継ぎつつも、最新の設備機器などを導入し、
2007年12月、新しく生まれ変わりました。
教育・研究の国際的な発信拠点にふさわしい
文化の薫り漂う施設として、その可能性が広がっています。

豊田講堂ホール
機能性と快適性を高めるために、音響や照明、空調設備を改善。舞台機能も拡充し、音楽や演劇などの催しも可能な学術文化の発信拠点へと進化した。また、客席の間隔を広げ、PCの使用に備えた電源やLANシステムも導入。同時通訳ブースを設置し、国際シンポジウムの場にふさわしい性能を完備する。



ホワイエ（アトリウム）

講堂と隣接するシンポジオンとの間に屋根を架け、2つの建物を一体化するホワイエ（アトリウム）を増設。面積約600㎡、高さ約10mの広々とした空間は、独立していた既存の建物を有機的に結び、それぞれの施設の機能を拡張。幅広い活用が期待される。



豊田講堂外観

世界的な建築家・横文彦氏による作品として知られ、日本建築学会賞にも輝く貴重な財産として、改修では杉板本実型枠を使用したコンクリート打放しを復元するなど、モダンな外観デザインを保存継承。日本の代表的な近代建築としての歴史的価値を尊重した。



豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイ



地域における大学の存在意義を、
70周年事業を通じて確立していく。

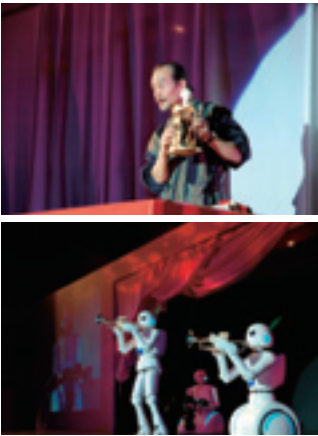
2008年2月2日、豊田講堂改修竣工式・同竣工記念ホームカミングデイがリニューアルした豊田講堂において開催されました。豊田講堂の改修は名古屋大学創立70周年事業の一環として、トヨタ自動車株式会社及びトヨタグループ各社の支援を受けて行われたもので、竣工記念式典では新たに加えられた施設や機能を紹介。名古屋大学のシンボルとして、その存在感を強くアピールしました。また、今回は毎年秋に行う「名古屋大学ホームカミングデイ」を竣工式と併せて開催。からくり人形の実演やトヨタ・パートナーロボットによる演奏などを行い、大盛況を博しました。

当日、会場には同窓生、学生のご家族、ご来賓、地域の方々も含め約2,500名が詰めかけ、名古屋大学への関心の高さをあらためて認識。今後は70周年事業関連をはじめ、さまざまな形で豊田講堂をはじめとする施設を活用し、より地域に開かれた大学を目指していきたいと考えています。

同じく、創立70周年事業の一つとして創設された「名古屋大学基金」の活動も本格化。アジアを拠点にグローバル化を図る本学への支援を、各方面へお願いしています。2009年の創立70周年まで、いよいよ残すところ1年。節目に向けて記念事業委員会も発足し、準備体制も整いました。今後は、卒業生や退職職員、学生のご家族も含めた名古屋大学ファミリーの結束を一段と強化するとともに、基金などを通じて地元企業や地域の方々の協力も得ながら、大学の活力向上を推進。70周年を機に、地域における大学の存在意義を、さらに高めていきます。



豊田講堂改修竣工記念式典
記念式典には改修工事の完了を祝し、豊田章一郎全学同窓会会長（トヨタ自動車株式会社取締役名誉会長）、豊田講堂の設計・改修を担当した横文彦株式会社横総合計画事務所代表取締役、松原武久名古屋市長などの来賓が参加。豊田講堂改修を記念する銘板や加藤唐九郎作の陶壁「和多津海（わだつみ）」の除幕式、竣工記念パーティーなども華やかに開催された。



ホームカミングデイ
竣工式と同時開催されたホームカミングデイ。今回は「ものづくり源流・からくりからロボットまで」をテーマに、尾岡木偶師（びようでくし）九代玉屋庄兵衛氏による「からくり人形」の実演、トヨタ・パートナーロボットによる楽器演奏が披露された。また、トークセッション「日本の教育を考える」では熱い議論が交わされ、名古屋大学への期待が語られた。

特別招へい教授



世界トップクラスの研究者を招き、
教育・研究活動を飛躍させる。

2007年4月に制定された「名古屋大学特別招へい教授制度」。優れた研究業績を有する世界トップクラスの研究者を招き、研究活動に助言などをいただくことで、教育・研究活動を一層推進しようと導入されました。名古屋大学高等研究院名誉院長、名古屋大学名誉博士、グローバルCOEプログラムなどの教育研究拠点から推薦を受けた研究者を選考し、「特別招へい教授」として迎え入れています。

その第1号には、カーボンナノチューブの発見者であり、高分解能透過型電子顕微鏡法の世界最高峰のスペシャリストとして知られる飯島澄男名城大学大学院理工学研究科教授が就任。続いて、理学部の卒業生であり、素粒子物理学の基礎となる「標準理論」を打ち立てた益川敏英京都産業大学理学部教授・京都大学名誉教授。さらに、たんぱく質の次世代の構造解析技術を開発した甲斐荘正恒首都大学東京特任教授、地球気候のモデリングと予測研究で世界をリードする真鍋淑郎プリンストン大学客員研究員と、現在までに4名の研究者を招致しています。

これまでに特別招へい教授による国際セミナーを開催したほか、各分野での共同研究も推進。世界を変える革新的な成果を創出した研究者たちの話を聞き、学生や若手研究者たちはおおいに感銘を受けるとともに、偉大な先輩らと同じキャンパスの空気を吸い、常に真理を追究する研究姿勢を身近に感じることで、研究への意欲を新たにしています。特別招へい教授の存在と助言は、学内の教育研究環境を活性化させ、名古屋大学のさらなる躍進につながっていくはずです。

飯島澄男 特別招へい教授

1939年生まれ。東北大学大学院理学研究科物理学専攻博士課程修了。理学博士。米国アリゾナ州立大学研究員などを経てNECに入社。1991年、カーボンナノチューブを発見。その功績によりベンジャミンフランクリンメダル物理学賞など各賞を受賞。現在、NEC特別主席研究員、名城大学大学院理工学研究科教授など。

益川敏英
特別招へい教授



1940年生まれ。名古屋大学大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。京都大学大学院理学研究科教授などを経て、現在、京都産業大学理学部教授・京都大学名誉教授。1973年、京都大学理学部の助手だった小林誠高エネルギー加速器研究機構名誉教授とともに「小林・益川理論」を発表。2001年文化功労者。

甲斐荘正恒
特別招へい教授



1942年生まれ。東京都立大学理学部卒業。理学博士。味の素（株）中央研究所、カリフォルニア工科大学博士研究員、東京都立大学理学部化学科教授などを経て、現在、首都大学東京特任教授。

真鍋淑郎
特別招へい教授



1931年生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。理学博士。アメリカ海洋大気庁主席研究員、プリンストン大学客員教授、科学技術庁 地球フロンティア研究システム温暖化予測研究領域長などを経て、現在、プリンストン大学客員研究員。地球温暖化研究の世界的権威で、ブループラネット賞をはじめ各賞を受賞。

国際産学官連携

国立大学初となる産学官連携海外拠点を置き、
地域と世界を結ぶ窓口。

大学の技術シーズを産業界と連携して進化させ、地域社会に貢献するために、名古屋大学では産学官連携、知的財産の創出・活用、大学発ベンチャー企業の設立に力を入れてきました。そして、今後は国内だけでなくグローバル市場への対応も強化するため、国際的な産学官連携を進めていきます。中部地域の国際産学官連携の窓口としての役割を果たすほか、世界レベルの学術基盤、大学間で進めてきた国際交流、海外の投資を呼び込むものづくり拠点としての産業基盤の充実に向け、活動を強化しています。

その皮切りとして、2007年に米国・ノースカロライナ州立大学及びノースカロライナ大学チャペルヒル校、大学発ベンチャーにおいて実績がある英国・ウォリック大学と産学連携協定を締結。2008年1月には全米3位のバイオクラスターのあるノースカロライナ州に、非営利法人「名古屋大学テクノロジー・パートナーシップ」を設立しました。産学官連携拠点として、海外大学・企業の情報と中部地域の大学・企業の情報を相互に交換、マッチングを行う双方向のゲートウェイを提供。人員を常駐させ、新技術の創出や共同研究などを支援していくものです。

非営利法人を現地に置くのは、国立大学では初の試み。国際条約などに対応する法務面も整備し、いよいよ本格的な活動が始まっています。今後は大学間で相互にオフィスを持ち合い、人材の交流も行うなど提携拠点との交流を深めると同時に、産学官連携海外拠点のネットワークを広げ、国境を越えたイノベーション創出に貢献したいと考えています。



ノースカロライナ州立大学との連携

ノースカロライナ州への拠点を機に、2007年9月、産学連携協定を締結。ノースカロライナ州立大学は農業、工学、生命科学、繊維分野で高い研究実績をあげ、1985年には学術交流に関する全学交流協定も締結している。世界の大学で構成される国際学術コンソーシアム(AC21)の主要メンバー。

ノースカロライナ大学
チャペルヒル校との連携

2007年9月、産学連携協定を締結。ノースカロライナ大学チャペルヒル校は、バイオテクノロジー、医療、医薬品分野で優れた研究実績を誇り、1989年には医学部間でも学術交流協定を結んでいる。ノースカロライナ州立大学とともに、国際産学官連携の中核として連携体制を強化している。



ウォリック大学との連携

2007年11月、産学連携協定を締結。ウォリック大学は、研究及び講義の優秀さで国際的な名声を獲得した英国でも屈指の高等教育機関であり、欧州トップクラスのビジネススクール、テクノロジー研究施設、サイエンスパークやベンチャー企業研究所なども擁する。国際学術コンソーシアム(AC21)の主要メンバー。

東京フォーラム

司法国際化の先駆者として、
アジア法整備支援の成果を発信。

多様な教育・研究、国際的な学術交流の成果を国内外にタイムリーに発信するために、2003年から東京地区で開催している「名古屋大学東京フォーラム」。2007年10月の「第5回名古屋大学東京フォーラム」では「アジアに繋ぐ知の架け橋～飛翔するアジア諸国への法整備支援～」をテーマに、法政国際教育協力研究センター(CALE)と法学研究科が展開する「アジア法整備支援プロジェクト」「日本法令の外国語翻訳プロジェクト」などの活動を紹介しました。

法学研究科では1998年から、法整備支援の一環として優れた法曹人材を育成する法学教育支援に取り組んでいます。これまでにアジア諸国から裁判官、弁護士などの職に就く社会人も含め多くの留学生を受け入れ、英語による日本法の教育を通じて、より高い知識を備えた人材を本国へ送り出してきました。こうした実績をもとに真の支援体制を確立するため、2005年にウズベキスタン・タシケント国立法科大学に日本語による日本法の教育を行う「日本法教育研究センター」を開設。現在はモンゴルやベトナムにも設置し、カンボジアにもセンターを置く予定です。

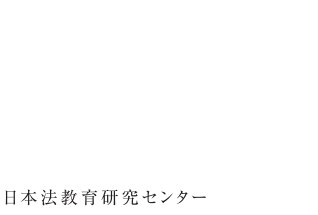
こうした活動の結果、東京フォーラムにはカンボジア、ウズベキスタン、ベトナムの司法大臣などが来賓として参加。これまでの教育支援に感謝の言葉をいただくなど、あらためて名古屋大学の国際貢献に対する高い評価を国内外に示すことになりました。アジアにおける名古屋大学の取り組みは、日本の司法の国際化の先駆けとなるものでもあり、今後のさらなる支援活動の広がりに期待が寄せられています。



関係各国の展示ブース



壇上の来賓・記念講演者

テレビ会議による
日本法教育研究センターの紹介

日本法教育研究センター
日本法の専門家を育成を目指し、名古屋大学が文部科学省の支援を得て開設。「日本語による日本法教育」を実現するため、現地大学と協力して教育を行う。名古屋大学に本部を置き、現在までにタシケント国立法科大学、モンゴル国立大学法学部、ハノイ法科大学にセンターを設置。センターは、現地の情報収集・発信などを行う研究拠点としての役割も担う。

大学院博士課程後期課程に 心理危機マネジメントコースを設置。

近年、あらゆる場面において危機管理の重要性が高まっています。学校場面においても、危機管理に重点を置いた学校保健法の改正が進められています。小中学生の抑うつ、いじめやいじめによる自死、非行、犯罪被害など心理危機が大きな社会問題となっています。教育発達科学研究科心理発達科学専攻では、2008年4月、博士課程後期課程に、新コース「心理危機マネジメントコース」を設置しました。このコースは、心の問題や心理危機に関わる仕事をしている社会人を受け入れ、心理危機への組織的対処や予防の最前線をリードする、臨床心理学や社会心理学、発達心理学、その他関連領域の高度な研究能力と人間についての深い学識や専門的力量を持った専門家を養成することを目的としています。これは我が国初の取り組みであり、優れた心理危機マネージャーを輩出すると同時に、活躍の場を開拓します。



上) 中日新聞2008年2月4日の記事
下) 心理危機マネジメントコースのリーフレットと学生募集要項

超少子高齢社会を見据えて トータルヘルスプランナー養成コースを設置。

「トータルヘルスプランナー（THP）養成コース」は、今後予想される超少子高齢社会を見据えて、包括的保健医療モデルを開発・推進する人材育成を目指し、2007年4月、大学院医学系研究科博士課程前期課程に2年間コースとして新設されました。医学系研究科看護学専攻とリハビリテーション療法学専攻を中心に、愛知県、医学部寄附講座などの協力も得て、専攻・分野横断型の系統的大学院教育プログラムとして、大学院教育全体の活性化を目指したものです。初年度は41名の受講希望者があり、THP概論、特論、セミナーなどが実施されました。2008年3月にはTHPコース開講記念シンポジウムを開催し、全国より200余名の参加者がありました。また、この教育プログラムは、2007年度文部科学省大学院教育改革支援プログラムに「専攻横断型の包括的保健医療職の育成」として採択されました。



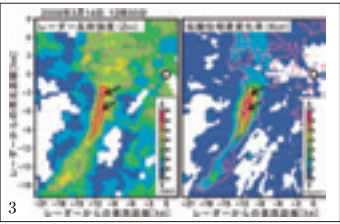
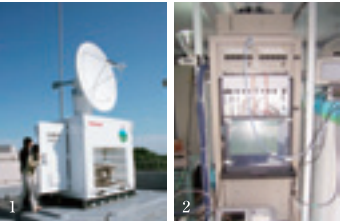
上) 3月のシンポジウム会場風景
下) シンポジウムの取り組みの経過報告

派遣型高度人材育成協同プラン・ 家畜バイオ分野の国際産学協同人材育成。

「家畜バイオ分野の国際産学協同人材育成—キャリアパス開拓に向けた英国企業との連携—」は、アカデミック分野ばかりでなく、世界に対抗し得るバイオベンチャー企業の設立や発展にも貢献できる能力を備えた人材を社会に送り出すことを目的としています。国際的視野と行動力を持つ次世代の育成を目指し、文部科学省の支援を得て、2005年から5ヵ年計画で実施。これまで毎年6～8名の大学院生を1～3ヵ月間、イギリス企業などの研究開発現場に派遣しました。2008年度からは、産学連携による実践型人材育成事業（長期インターンシップ）として「動物バイオテクノロジー分野における大学院生の国際的キャリア開発」に改め、派遣先もイギリスから欧米に拡大しました。海外旅行や語学研修では得られない海外研究体験が契機となり、将来、産業界においても国際的に活躍する人材が現れることを期待しています。



上) 2007年度実施のワークショップ会場風景
下) 英国アブカム社研究員



(写真1) 地球水循環研究センター屋上に設置したマルチパラメータレーダ (写真2) マルチパラメータレーダの固体化された送受信機等装置 (コンパクトな筐体に総てが納まります) (写真3) レーダ反射強度と伝播位相変化率



上) シンクロトン光利用施設完成予想図 (2011年度)
下) 大学連合4大学と愛知県との調印式の様子



上) 基調講演
下) パネルディスカッション

降水システムの水循環特性を解明する マルチパラメータレーダを設置。

地球水循環研究センターでは、降水システムの3次元気流構造と降水特性の3次元分布などを連続的に観測し、降水システムの水循環特性を解明するため、2007年11月に「水循環観測マルチパラメータレーダシステム」を設置しました(写真1)。本システムは、従来にない、降水粒子の形状(雨が強くなると、雨滴の形状が球形から扁平な形になるなど)や粒径分布などの観測機能を持ち、より正確な降雨強度を求めることができます。この機能を利用し、観測と数値実験とを組み合わせ、将来的には落雷や竜巻の発生予測方法の開発に結びつける計画です。また、本システムは、発信機を固体化し(写真2)、小型軽量化して安定した観測が可能になりました。濃尾平野周辺の雨雲の観測をはじめ、北陸地方の雪雲や、海外の降雨の観測を実施し、気候変動に伴う降雨特性の変化に関する観測を実施する予定です。

シンクロトン光利用施設に関する 連携協力協定を、4大学と愛知県が締結。

2007年4月1日、学内共同教育研究施設として小型シンクロトン光研究センターが設置されました。このセンターは、2011年度中に愛知万博跡地に完成予定のシンクロトン光利用施設の設計と建設及び研究推進の母体となるものです。同施設は、名古屋大学の立案のもと、愛知県、当地区の産業界、大学、研究機関が一体となって建築を進めています。2008年3月4日には、本学を幹事校とする大学連合(名古屋大学、名古屋工業大学、豊橋技術科学大学、豊田工業大学)と愛知県との間で、支援協力に関する協定書の調印式が愛知県公館で行われました。本協定は、シンクロトン光利用施設の早期の設置と、円滑な運営体制を構築するためのもので、これに基づき、大学連合と愛知県が整備・運営主体である科学技術交流財団に対して協力し、支援を実行しています。

持続可能な発展のための教育(ESD) 促進ワークショップ・国際シンポジウムを開催。

「持続可能な発展のための教育(ESD: Education for Sustainable Development)」は、ユネスコが主として推進している21世紀の教育スローガンです。名古屋大学では、2008年2月3日、日本・ユネスコパートナーシップ事業として「ESD促進ワークショップ・国際シンポジウム」を開催し、多くの市民の方々の参加を得ました。貧困や紛争のない平和な世界が持続的に創造されていくためには、グローバルな視点とローカルな課題への眼差しの両方が必要です。ESDを担う大学院として、国際開発研究科では途上国の開発問題と国際協力、環境学研究科では「持続性学」と「安全安心学」を両輪とした環境学を学べるカリキュラムを備えています。名古屋大学は、今後こうした教育内容をさらに発展させ、大学院の共通カリキュラムとして構築し、地球市民の発想から社会・国際貢献できる人材育成を目指していきます。

各 部 局 の 取 り 組 み 一 覧

- ◎ 高等研究院
- ◎ 文学部・文学研究科
- ◎ 教育学部・教育発達科学研究科
- ◎ 法学部・法学研究科
法政国際教育協力研究センター

- ◎ 経済学部・経済学研究科
- ◎ 情報文化学部
- ◎ 理学部・理学研究科
- ◎ 医学部・医学系研究科
- ◎ 医学部附属病院
- ◎ 医学部保健学科・医学系研究科
- ◎ 工学部・工学研究科
- ◎ 農学部・生命農学研究科

- ◎ 国際開発研究科
- ◎ 多元数理科学研究科
- ◎ 国際言語文化研究科
- ◎ 環境学研究科
- ◎ 情報科学研究科
- ◎ 環境医学研究所
- ◎ 太陽地球環境研究所
- ◎ エコトピア科学研究所
- ◎ 附属図書館
- ◎ 地球水循環研究センター
- ◎ 情報連携基盤センター
- ◎ アイソトープ総合センター
- ◎ 物質科学国際研究センター
- ◎ 高等教育研究センター
- ◎ 農学国際教育協力研究センター
- ◎ 年代測定総合研究センター
- ◎ 博物館
- ◎ 小型シンクロトン光研究センター

[横断的取り組み]

- ◎ 国際開発研究科／環境学研究科
- ◎ 物質科学国際研究センター／理学研究科

全学教養科目「学問の面白さを知る」を開講

文学部創立60周年記念学術講演会・学術シンポジウム及び祝賀会を開催

大学院博士課程後期課程に「心理危機マネジメントコース」を設置

ベトナムに日本法教育研究センターを設置

海外インターンシップ（シンガポール）を実施

学生（1年生全員、2年生以上は希望者）に対する英語能力検定試験（TOEIC IPテスト）を試行導入

国立科学博物館において第15回上野の山発 旬の情報発信シリーズ「宇宙137億年の旅」を開催

がんプロフェッショナル養成プラン「臓器横断的がん治療を担う人材養成プラン」を推進

医療安全管理職員研修を実施

トータルヘルスプランナー（THP）養成コースを設置し、記念シンポジウムを開催

大阪大学・東京工業大学とともに3大学工学系人材交流プログラムを実施

「派遣型高度人材育成協同プラン」家畜バイオ分野の国際協同人材育成
—キャリアパス開拓に向けた英国企業との連携—を推進

大学院教育改革支援プログラム「国際協力型発信能力の育成」の採択・実施

「名古屋大学数学アゴラ」を開催

「産学社会連携型メディア教育モデルの構築」のための言語文化フォーラムを開催

気候変動、温暖化、持続性にかかわる一連の国際シンポジウム開催

南山大学・愛知県立大学・静岡大学とともに「先導的ITスペシャリスト育成推進プログラム」を推進

市民公開講座「知っておきたい甲状腺の病気」を開催

国内外の匿名評価者による研究業績評価及び外部評価委員による活動全般に対する評価を実施

「エコトピア2020の実現に向けて—エコトピア科学研究所の研究戦略—」を策定・公表

東海地区デジタルレファレンス・フォーラムを開催

マルチパラメータレーダを設置

先端的大規模計算シミュレーションプログラム利用サービスを開始

X線作業主任者向け安全取扱実習を実施

ロベルト・フーバー博士を国際シンポジウムに招へい、名古屋大学名誉博士の称号を授与

大学教員準備プログラム（大学院生対象）「大学教員をめざす君へ」を実施

大学と国際協力機関との組織連携の強化を推進

地変に着目した内陸地震の周期解析プロジェクトを実施

次世代教育プログラム「ミクロの探検隊」を実施

小型シンクロトン光研究センターを設置、
4大学と愛知県がシンクロトン光利用施設に関する連携協力協定を締結

持続可能な発展のための教育（ESD）促進ワークショップ・国際シンポジウム
～地球市民の視点から地球の未来を考える～を開催

ドイツ・ミュンスター大学と日独共同大学院プログラムを実施

学 生 か ら の 寄 稿 Letter from Student

全 員 で 勝 ち 取 っ た
6 連 覇 と
初 出 場 の 偉 業 。

名古屋大学

体育会

女子陸上競技部

2007年は名古屋大学女子陸上競技部にとって、
忘れられない年になりました。「七大戦6連覇」と「全
日本大学女子駅伝初出場」、この2つの偉業を成し
遂げたからです。

七大戦は旧帝国大学7大学による対抗戦。プレッ
シャーに選手不足、他大学の戦力アップといった不
安が重なり、簡単に勝てる状況ではありませんで
したが、女子部員11名全員が、選手としてサポート役
として持てる力をすべて発揮。最後まで諦めない強
い気持ちで、素晴らしい結果につながったのです。
誰一人欠けても成し得なかった、まさに全員で勝ち
取った6連覇でした。

全日本大学女子駅伝への出場は、以前からの大
きな目標。当初は駅伝を組めることへの喜びを感じ
るばかりで、私立の強豪校に人数も地力も及ばない
状況が続きましたが、「いつか全日本に」という思い
を胸に、一人ひとりが懸命に練習を積んできました。

そして、ついに東海地区予選を勝ち抜き、既に男子
が全国で繋いでいた名大の襷を、女子も初めて全
国の舞台で繋ぐことになったのです。大会当日、初
出場にも臆せず全員が力走。ただ、全国のレベルは
高く、悔しくも最後まで襷を繋ぐことができませんで
した。結果は23位、2時間25分1秒でゴール。しかし、
多くの方々に応援をいただいて全国の舞台に立つこ
とができ、良い経験になりました。この経験を糧に、今
後もチーム一丸となって頑張っていきたいと思います。

名古屋大学体育会陸上競技部

男女合わせて約100名もの部員が所属。短距離、フィールド、中長距離パートにわかれ、近
隣大学の陸上部とも一緒に練習を行っている。全国各地で行われるさまざまな対抗戦に参
加し、全国大会への出場も多数。2007年は男女ともに七大戦で総合優勝を果たす。



大学概要

概 略

総 長	平野 眞一
理 事	宮田 隆司（国際交流・産学官連携関係担当）・副総長 大 峯 巖（財務・学術情報関係担当）・副総長 佐分 晴夫（人事・労務・法務関係担当）・副総長 杉浦 康夫（病院・施設整備・環境安全関係担当）・副総長 杉山 寛行（教育関係担当）・副総長 山本 進一（研究関係担当）・副総長 高 橋 誠（総務・事務総括関係担当）・事務局長
副 総 長	松下 裕秀（評価・総合企画関係担当）
監 事	木村 洋一 ● 学外 湯本 秀之 ● 学外・非常勤
職 員 数	大学教員1,754名 附属学校教員38名 事務職員・技術職員1,453名 合計3,245名
面 積	土地面積3,247,605㎡ 建物面積730,583㎡ ※職員数、面積は平成20年5月1日現在

学部・大学院学生数				平成20年5月1日現在
部局名	学部学生	大学院学生	合 計	
文学部・文学研究科	609 （10）	312 （47）	921	（57）
教育学部・教育発達科学研究科	328 （12）	250 （35）	578	（47）
法学部・法学研究科・法科大学院	701 （8）	382 （88）	1,083	（96）
経済学部・経済学研究科	927 （15）	138 （35）	1,065	（50）
情報文化学部	368		368	
理学部・理学研究科	1,185 （1）	541 （18）	1,726	（19）
医学部・医学系研究科	1,489 （1）	929 （60）	2,418	（61）
工学部・工学研究科	3,329 （78）	1,543 （127）	4,872	（205）
農学部・生命農学研究科	765 （8）	386 （26）	1,151	（34）
国際開発研究科		292 （138）	292	（138）
多元数理科学研究科		145 （1）	145	（1）
国際言語文化研究科		224 （101）	224	（101）
環境学研究科		465 （76）	465	（76）
情報科学研究科		369 （46）	369	（46）
人間情報学研究科		5	5	
合計	9,701 （133）	5,981 （798）	15,682	（931）

※（内数）は留学生数
※学生数には、学部・大学院研究生、学部・大学院特別聴講学生、聴講生、特別研究学生、科目等履修生を含まない

教育学部附属学校生徒数				平成20年5月1日現在
学校	入学定員	学級数	生徒数	
中学校	80	6	238	
高等学校	120	9	358	
合計	200	15	596	

沿 革

前身校期	
1871（明治 4）年	仮病院 仮医学校開設
1872（明治 5）年	義病院設置
1873（明治 6）年	病院 医学講習場設置
1876（明治 9）年	公立医学所 公立医学講習場設置
1878（明治11）年	公立医学校設置
1881（明治14）年	愛知医学校設置
1901（明治34）年	愛知県立医学校設置
1903（明治36）年	愛知県立医学専門学校設置
1908（明治41）年	第八高等学校設置
1920（大正 9）年	愛知医科大学設置 名古屋高等商業学校設置
1931（昭和 6）年	（官立移管）名古屋医科大学設置

帝国大学期	
1939（昭和14）年	名古屋帝国大学創設 医学部と理工学部の2学部で発足 名古屋帝国大学 臨時附属医学専門部設置
1942（昭和17）年	理工学部を理学部と工学部に分離
1943（昭和18）年	航空医学研究所設置（1945年廃止）
1944（昭和19）年	名古屋工業経営専門学校設置（1946年廃止） 名古屋経済専門学校設置 名古屋帝国大学附属医学専門部設置
1945（昭和20）年	岡崎高等師範学校設置
1946（昭和21）年	環境医学研究所設置
1947（昭和22）年	名古屋大学と改称 名古屋大学附属医学専門部設置
1948（昭和23）年	文学部、法経学部を設置

新制大学期	
1949（昭和24）年	旧制名大、医専部、八高、名経専、岡崎高師を包括 新制名古屋大学として再出発 文、教育、法経、理、医、工の6学部で発足 空電研究所を設置
1950（昭和25）年	法経学部を法学部と経済学部に分離
1951（昭和26）年	農学部設置
1953（昭和28）年	文学、教育学、法学、経済学、理学、工学の6研究科を設置
1955（昭和30）年	医学、農学の2研究科を設置
1961（昭和36）年	プラズマ研究所設置
1963（昭和38）年	教養部設置
1973（昭和48）年	水圏科学研究所設置
1977（昭和52）年	名古屋大学医療技術短期大学部設置（2001年廃止）
1989（平成元）年	プラズマ研究所を核融合科学研究所へ発展
1990（平成 2）年	空電研究所を太陽地球環境研究所に改組
1991（平成 3）年	大学院国際開発研究科設置
1992（平成 4）年	大学院人間情報学研究科設置（2003年廃止）
1993（平成 5）年	教養部廃止、情報文化学部設置 水圏科学研究所を大気水圏科学研究所に改組（2001年廃止）
1995（平成 7）年	大学院多元数理科学研究科設置
1997（平成 9）年	大学院農学研究科を大学院生命農学研究科に名称変更
1998（平成10）年	大学院国際言語文化研究科設置
2000（平成12）年	大学院教育学研究科を大学院教育発達科学研究科に名称変更
2001（平成13）年	大学院環境学研究科設置 地球水循環研究センター設置
2002（平成14）年	情報連携基盤センター設置 大学院医学研究科を大学院医学系研究科に名称変更
2003（平成15）年	大学院情報科学研究科設置

国立大学法人期	
2004（平成16）年	国立大学法人名古屋大学設立 大学院法学研究科実務法曹養成専攻（法科大学院）設置 エコトピア科学研究機構設置
2006（平成18）年	エコトピア科学研究所設置

組織・機構



「名古屋大学を出た者が、なぜ噺家に？」：私のプロフィールを見た人が、必ず聞く質問である。「つい、出来心で：」と、落語流に答えることにしているが、二年生の時に自分の将来を模索し、決断した進路であった。もちろん、入学時の目標は、本来あるべき方向に向かっていたのであるが、あらためて自分自身を見つめ直してみると、自分に合った、自分の特性を活かせる道は別にあるのでは？と考えてのことであった。

当時、既に大学卒の噺家はいくらもあり、平均入門年齢も高くなつてきてはいたが、国立大学卒の噺家は史上初のことで（中退者はあり）、珍しがられたものである。現在では東大卒、京大卒の噺家も誕生し、学歴に関係ない職業を選ぶ者も増えているようだ。

科学に挺身する、あるいは大学で学んだ知識を活かして社会で活躍するといった結果にならず、大学に対して、まことに申し訳ない気持ちはずっと持ち続けているが、たとえ噺家であっても、名古屋大学の「豊かな発想」「自由な研究」といった学風の片鱗だけは身につけたつもりであり、話芸の研究、発展に役立てていく予定である。

落語の世界は、師匠から弟子への口伝により噺を継承していくが、間違いや時代に合わなくなった言葉、演出も多いため、古いままではなく、常に改革を続けながら伝統を継承していかなければならない。私の場合、修行中は嫌われたり、いじめの対象となったアカデミックなイメージを活かし、噺の史実や言葉の正確さといった真理の探究、時代に合わなくなったり未完成なままのオチの改良、科学的知識に基づく環境問題などをテーマとした『お笑い』の創作などに取り組んでいきたいと思っている。

卒業生からの寄稿 Letter from Alumnus

学風を噺に活かす

三遊亭圓王



さんゆうてい えんおう

1954年、静岡県生まれ。

1972年、名古屋大学理学部入学。

1977年、名古屋大学理学部地球科学科

（現・地球惑星科学科）を卒業と同時に噺家となる。

（社）落語協会所属。故・6代目圓生一門。

1995年、真打昇進、圓王と名乗る。



名古屋大学 プロフィール 2008

発行年月／2008年6月

企画編集／名古屋大学広報室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

Tel 052-789-2016

<http://www.nagoya-u.ac.jp>